

透析を始めて 15 年という時間とケア論

今日は春を思わせるような良い天気の日曜日です。

しばらく KATARI をお休みしました。

その間に 2 月 2 日より演題登録と事前登録が始まりました。皆様のエントリーをお待ちしています。エントリーくださった皆様、エントリーの手順はスムーズだったでしょうか。気になります。

第 12 回学会では透析療法を受けて生活をされている中村厚さんに患者さんの立場から登壇していただく予定になっています。

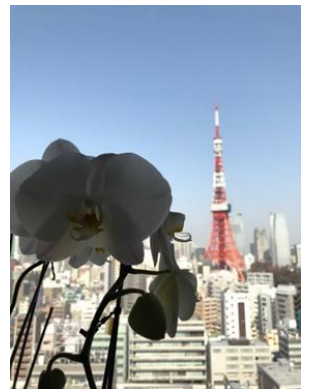
日ごろ患者さんと関わっている私たちですが、透析療法を行いながら生活をする体験を病院という場を離れてお聞きしたいと思います。透析を始めて 15 年という時間は中村さんにとってどのような時間なのか、看護師はどのように中村さんのそばにいるのか、中村さんから見た看護師とはどういう存在なのか、中村さんはどのように自分の生活を組み立ててきたのか、さまざまな問いが浮かびます。FACEBOOK を積極的に行っているようです。

『「病の語り」が描き出す悲嘆・人生・希望』というテーマで、医学界新聞に基調講演の江口重幸先生、教育セミナーの安酸史子先生との座談会が掲載されています。「病いは経験である」というアーサー・クラインマンの言葉を手掛かりにケア論をお話しました。高名なお二人の先生との座談会、しかも司会を仰せつかり、おいしいお弁当がのどを通らないくらい、緊張しました。いったんお話を始めるとお二人のお話が興味深く、思わず司会であることを忘れて聞きいってしまいました。

「医療者は道聞かれ顔であることが大切」という江口先生の言葉。「人は具体的な経験から見えてくるものがある」という安酸先生の言葉。どちらも深く心に残りました。

学会でのお二人のご講演がとても楽しみです。

2018.2.24 東 めぐみ



東京タワーと胡蝶蘭